

スペインの シエスタ

シエスタとは スペインでは正餐とする昼食後にシエスタ (siesta) と呼ばれる習慣が根づいていた。この言葉はスペインのあらゆる辞書や事典を

参照しても、ほぼ同じような説明がなされている;「最も暑くなる南中時における仮眠、または、昼食後の憩いや睡眠」と。

1992年夏、シリア沙漠のカナート (地下水路) 調査に同行し、現地に1月近く滞在したことがあった。その際に、シエスタの「原型」に触れる機会があった。

払暁時に数十頭の羊や山羊を連れ、草原をめざすبدوインの少年に同行した。20km前後の行程のなかで、野草地で草を食ませ、水を摂らせる。灼熱の日差しが照りつけるようになると、羊は疎らな木陰で横たわる。少年も「もうしょうがないや」と呟きながら、羊の群れの中で仮眠に入る。それは17世紀のムリーヨが描いた画を髣髴とさせる光景であった。

ヨーロッパでは南欧以外にシエスタの習慣が見られず、イベリア半島のなかでもスペインに定着したのは、8世紀から15世紀末まで続いたイスラム社会の影響に他ならない。シエスタはアラビア半島における放牧形態と家畜の生態に由来すると、得心がいった。

変容するシエスタ イスラム社会からカトリック社会に変化すると、スペイン人は日曜日と祝祭日を安息日とし、教会のミサへの参列を常とするようになった。教会から帰宅後に昼食のパエーリャを賞味し、シエスタの後には、休日に着飾るドミンゲーロやドミンゲーラ (dominguero,ra) として、ウインドーショッピングを楽しむ。子女には外出用の革靴を履かせ、精一杯のお洒落をさせる。

1970年代末から80年代初期にはこうした人々の生活習慣を見聞できたが、80年代中期から大きく様変わりをみせていった。その契機は1986年のスペインのEC加盟であったように思える。

EC加盟が日程に登りはじめると、ある全国紙は「シエスタ習慣を改めよう」とするキャンペーンを展開した。ビジネスアワーが他の西欧諸国と異なることはス

ペイン経済にマイナスになると理由づけていた。

確かに、官公庁はもとより企業も零細業者も午後2時から4時にかけてのシエスタ時間帯は一時休業状態となっていた。80年代初期にマドリードで過ごしていたが、「4時まで閉館です」と官公庁の図書資料室を追い払われ、大学構内の芝生で昼食に添えられたワインの酔いを醒ましたこともあった。

グローバル化とシエスタ シエスタ廃止のキャンペーンは効を奏しなかったが、グローバル経済の浸透はこれまでの習慣を揺るがせていった。農村部では今でもシエスタを続けているが、大都市やその近郊では著しい変貌をとげている。

EC加盟は外国企業の進出を促し、都市近郊には大規模な工業団地が造成されていった。工場労働者は昼食とシエスタのために帰宅することが難しくなり、団地内の食堂で昼食と休憩をとるようになっていった。官公庁や企業の管理職も同様に、ビジネスアワーのヨーロッパ化を余儀なくされていた。CBD周辺にはこうした新たな客層をターゲットとする食堂が開店し、「昼食指定食券有効」が、張り出されていった。

スペインでは一家が揃って昼食をとってきた。しかし、主婦層の就業、職住分離と学校給食の普及で、この習慣も崩れつつある。そのため、シエスタを家族で愉しむことは少なくなり、短時間の休息となりつつある。数世紀にわたりスペイン社会を覆っていたシエスタの変貌は、日曜日の生活スタイルにもおよんでいる。

1978年憲法は「国教」を廃止し、信教の自由となったこともあり、居ながらにしてミサのテレビ中継を耳にする家族が増えていった。昼食に添えられるパエーリャは、レストランでは外国人観光客のオーダーに応じられるよう日時を問わずに準備するようになってきた。欧米商業資本の進出は年中無休の大型店舗を創業し、24時間開店の店舗網を形成している。風物詩ともいわれた日曜日の派手な衣装姿は繁華街から消え、大型店舗はジーパン姿の買い物客で溢れている。

「無形文化財」に値するシエスタの変貌は、EC加盟に端を発するグローバル化によるスペイン社会の変容を象徴している。(明治大学教授 長岡 顯)